

京都部落問題 研究資料センター通信

第53号

発行日 2018年10月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

当資料センター主催「二〇一八年度差別の歴史を考える連続講座」の第一回・第二回・第三回を京都府部落解放センターで、六月一日・二九日・一〇月五日に開催しました。

講演要旨は次の通りです。詳しくは年度末に発行予定の講演録をご参照ください。

第1回

中近世の「坂」の領域と風景

―弓矢町と物吉村の成立をめぐる―

講師 下坂守さん
(日本中世史研究者)

現在の松原通(かつての五条通)の鴨川を渡って東側にある集落はかつて「坂」と呼ばれ、東山における葬式に関する権限、葬具を取得する権利などをもっており、また当時「らい者」と呼ばれたハンセン病患者を管理・庇護する権限も持っていた。この「坂」の様子は、一六世紀半ばに参詣者勧誘のために描かれた絵図「清水寺参詣曼荼羅」や「八坂法観寺塔参詣曼荼羅」に見ることができる。

鴨川の橋を渡ると立派な木戸が

あり、そこで「らい者」たちが参詣者に物乞いをしている姿、その後ろには彼らの住居であった建物も描かれている。北・東・西にあった木戸も描かれている。

江戸時代の絵図を見ると、中世には河原であった場所が開発されて大きく景観は変わっているが、この集落の領域を木戸の位置などから確定することができる。この集落は大和大路と松原通の交差点を中心にそれぞれの道に面して東西南北に広がっており、建仁寺領などの町々と接していてその境には木戸が設置されている。またこの集落は寺の領地ではなく独立しており、「坂」から「弓矢町」と名前も変わり一般の町と変わらなくなっている。

江戸時代には「坂」は「らい者」の管理や葬式に関する権限も手放しており、「らい者」たちは「物吉村」と呼ばれる新たな集落を弓矢町の隣に作っていたことが絵図などからわかる。明治の記録では江戸時代、「らい者」たちはそこから市中に節句ごとに物貰いに回って米銭を得ていた。京都市中をくまなくまわるような仕組みを作っ

ていたのである。史料には「五節句の収入米五千石」とある。これは莫大な利益であり、彼らは当時、厳しい差別を受けていたが、差別と経済的な豊かさは別であったことがわかる。これは当時の河原者についてもいえることであった。

第2回

京都東山における江戸時代の新地開発

―建仁寺文書にみる鴨東の発展と居住地形成―

講師 小出祐子さん
(大阪芸術大学・京都精華大学非常勤講師)

鴨川の東側、四条通から五条通にかけて広い領地をもっていた建仁寺は、江戸時代に領地を開発して宅地を形成する。その宅地に関する詳しい史料が建仁寺に残されている。

一七世紀末までは、寺の西と南の門に面した門前以外はほとんどが畑地だったが、一八世紀に入り鴨川の護岸工事で河原地が整備されて以後、鴨東での宅地開発が進み、寺領地内に半世紀の間に古門前、新門前、古門前裏町、六波羅新地の四つの地域ができ、三三町

が成立する。この急速な宅地開発の背景には仏殿の再建などで多額の資金が必要となった寺の財政事情があった。それまでの畑地から宅地に転換することによって大きな収入増加となったのである。

この町々に住む人たちは地域によって様相が大きく違う。古門前地区は大工や畳屋といった寺に関わる職人や医者、造酒屋など有力者、八百屋などの商人が住む門前町らしい様相であった。しかし、一八世紀後半、最後に開発された六波羅新地は、往來の多い松原通沿いでは射弓場などの賑わい目的の商売が多かったが、それ以外は寂れた空地が広がっていたり、大規模な借地経営がなされていた。借家経営者が区画面積の大きい土地を取得して、細々とした借家を並べていたのである。

六波羅新地北側のやや寂れた場所に立ち並ぶ借家の間取りを見ると、四帖から一二帖半の一室が並び、共同便所は二、三軒に一つ、井戸は二〇から二五軒で共用していたことがわかる。六波羅南側の寂れた場所に立ち並ぶ借家の間取りでは、道に沿って二帖一室が一

二軒並び、共同便所も井戸も無く、最低限の居住区間であったことがわかる。そして、その裏には町が成立して五〇年たつても買い手がつかない空き地がひろがっていた。その理由としては、葬送の地であった鳥部野を管掌する宝福寺が近接していたこと、また、町の裏に葬送に関連すると思われる「鳥部野小屋」に住む集団がいたことなどから、中世の葬送の地としての色合いが残っていた地域として忌避されていたのではないかと推測される。

第3回

近代の育児祈願

―三宅八幡神社奉納絵馬からみえてくる子育て習俗―

講師 村上忠喜さん
(京都産業大学文化学部教授)

京都上高野にある三宅八幡神社は江戸時代に創建された夜泣き・疳の虫封じや子ども健康祈願で全国的に有名な神社で、江戸時代から多くの祈願者が訪れている。

近世期に絵馬堂が建てられ、大小の絵馬が数多く奉納されている。その多くは参詣の様子を描いたも

ので、団体で行列をなして参道を進む風景を描いた、一辺が一メートルを超すような大型の「参詣行列図」や祈願する子どもや家族を描いた小型の「参詣図」がある。これらの子育て祈願の絵馬一二四点は、二〇〇一年に京都市指定有形民俗文化財、二〇〇九年には国の指定重要有形民俗文化財に指定されている。

絵馬の奉納時期をみると、子どもの健康祈願が共同体から家族単位へと移り変わっていくにつれて行列図から参詣図へと変わっていることがわかる。また、これらの絵馬に描かれている人物には個人名や年齢、生年月日などが記されていてドキュメンタリー性に富んでいる。絵馬の奉納者は個人・家族のほか同業者や地縁組織で、先斗町や新橋の花街からの奉納もあり、芸子の子どもたちが祈願に来る様子が描かれている絵馬もある。今も神社には、上七軒と先斗町による二つの灯籠が建っている。

上高野はかつて岩倉、修学院などと共に洛中の富裕者、花街の子どもたちを預かった里子の村でもあった。この地域には子どもに関

する信仰の土壌があったといえる。また、育児祈願ではないが、明治四三年に田中の人力車夫たちが奉納した神功皇后を描いた絵馬も残っている。これは韓国併合を記念して奉納されたと思われるが、この年は叡山電車の敷設計画が出された年でもあり、多くの参詣者が人力車を利用したことへのお礼とこれからの繁盛を祈念して奉納されたとも考えられる。

二〇〇〇年以降、地元の奉賛会の人たちが、専門家の協力を得ながら自らで絵馬の保存・調査・研究を行い、展示館を建設するに至っている。これらの取り組みは文化財の資源化の取り組みとして大変注目されるものである。



本の紹介

伊藤 亜紗著 『どもる体』

渡辺 毅

(穀雨企画室代表)

障害者のものまねは、是か非か。こんな問いをFさんに向けてみた。Fさんは骨形成不全。生まれながらの下肢障害とともに七十有

余年の人生を歩んできた。と、不用意にそんな紹介をしようものなら、「ぼくは人生を『歩んで』きちゃおりません。何せ子ども時分からずっと歩けませんでしたからね」てな具合に涼しい顔して半畳を入れてきそうな、車いす生活の大ベテラン。普段は諷刺諧謔織り交ぜた受け答えが持ち味のFさんだが、件の問いには「うーん」と少し考えてから、真面目な調子でこう答えた。

「障害者のものまねで、障害者を馬鹿にしないものまねは見たことないしなあ」。馬鹿にされるのは不愉快。だから是非かでないええ、の判定。「でも」とFさんは続けて、「例えば障害をも

つ総理大臣が誕生して、それをまねする人が現れたら、そんなものまねはありだと思っよ」。

要するに、相当の社会的ステータスを得た人がものまねされるのは世の常で、障害をもつ首相でも現れれば、ものまねされて当然、それは障害者のものまねというよりも権力者のものまね、つまり是、だと。「けど今の世の中、障害者が総理大臣になる可能性なんて現実的にはほぼ閉ざされてる。結局、そこが問題なんだよね」。

彼の云いたいことはよく解る。それでも私は、障害者のものまねは是、とする側に与したい。重度脳性麻痺の友人のしぐさなんかを見てみると、むしろにまねしてみたくなる。馬鹿にする気は毛頭ない。ただ、あの動作をどうしたら私自身の体が再現できるか、と思わずにはいられない。

若いころ演劇人のはしくれだったからかもしれない。小さな劇団を主宰し、役者として舞台にも立った。若いとは恐ろしいもので、いっばしの役者になれると過信していた。そのためれっきとした訓練の一つが、つまりは「ものまね」だった。

寝たきりの失語症老人を演じることになったとき。高齢者施設を訪ね、放心したようにベッドに仰臥する老人を観察した。老人は意思表示しようにもうまくいかず、半開きの口を微妙にぎこちなく動かすばかり。そのさまを目に焼きつけた。当時の私は二十代。寝たきり老人を演ずるなんてどだい無理な話ではあったが、リアリティをできるだけ表現したかった。夜ごと寝床に仰向けになり、老人のあの口の動きを、下顎を緊張させて緩慢に唇を開閉させては「ものまね」し、何とか体得しようと試みたものである。

劇団の解散で幻に終わってしまった芝居では、筋萎縮性側索硬化症、いわゆるALSの人を演じるつもりで意気込んでいた。ALSの人

は、病の進行に伴ってコミュニケーションの回路が徐々に狭められていく。見た目には表情の変化も奪われていく。意思を表現することが困難になつていく身体をどうやって表現するか、という難問に立ち向かうつもりで、差し当たっては映像を見て、ALSの人の、無表情のような表情を観察し、「ものまね」しようと思つた。しかしこれが恐ろしく難しい。そうこうするうち、仲間たちが一人去り、二人去り、ALSの芝居どころではなくなつた。彼らはただ素直に「演じたい」と望んでいたのに、私が「無表情のような表情」とか変テコなことばかり考え始めたので、要するに嫌気がさしたのでらう。やがて劇団は解散へ追いやられてしまった。

待てよ。この稿はそもそも伊藤 亜紗著『どもる体』の紹介をするために書き始めたはずではなかったか？ ものまねだの、自らの演劇人時代の思い出だの、そんなことを書き綴つて、いったいどうするつもりか…。

どうするもこうするも、いったん始めた話だ。無下に引つ込めるわけにもいかない。

障害者のものまねを、まず中八九障害者を馬鹿にしたもので認めたくない、是か非かでいえば非だと云ったFさん。それに対し私は、演劇人のはしくれとしての経験上、必ずしもそうは思わないと考えていたのだが…。

「しかしねえ、渡辺君、ものまねと演技は別物ではないかね？」

Fさんはそう云うかもしれない。のみならず、障害者のものまねをすることは差別的であると感じている人たちの多くも、同じように云うかもしれない。

現にFさんは、韓国映画『オアシス』（イ・チャンドン監督、二〇〇二年）で重度脳性麻痺（CP）の女性を演じたムン・ソリの芝居を「あれはすごい。健常者があれだけリアルにCPを演じた例はなかなかないんじゃないか？」てな具合に絶賛していた。演技なら是、ということなのだろう。けれどもムン・ソリにしても、CPの女性を徹底的にものまねした積み重ね

の上に『オアシス』での名演技を創りあげていったに違いない。ムン・ソリは作品の中で、完璧に近いCPのものまねを披露している。という見方だつてできなくはない。「いや違う。ものまねと演技はやはり別。障害者のものまねは常に差別性を…」。こうなると「ものまねとは何か」と、文化論の領域での水かけ論が延々と続きかねない。私としてはただ、「障害者のものまねは障害者を馬鹿にしている」と、諷刺諧謔が持ち味のFさんでさえいつになく真面目な表情で口にする言説に対し、いやいや、そうじゃない障害者のものまねだつてある、と抗弁してみたいだけなのだ。自分にはない身体性をもつ、この場合は障害者という「他者」の身体感覚、それへの興味関心が昂じてくると、演劇人のはしくれだったからか、その身体感覚を自らの身体で再現したくなる。だから模倣、すなわちものまねを試みるってことは、馬鹿にしているわけでも差別しているわけでもないんですよ。

吃音に対しても然り…。

*

と、やっと吃音に関する身体論を展開した伊藤亜紗さんの『どもる体』の紹介にたどり着きかけたのだが、その前にもう少しだけ回り道。それは『志乃ちゃんは自分の名前が言えない』（湯浅弘章監督、二〇一八年）という映画の話。

タイトルが長いので『志乃ちゃん』と略するが、この『志乃ちゃん』の主人公の志乃ちゃんは、吃音の女子高校生。ごく身近な人と話すとき、独りごとを云うとき、歌をうたうときには吃音が出ないけれども、そうでないときは、喋ろうとすればするほど言葉が出てこない。特に母音の次が出てこない。志乃ちゃんの姓は大島なので、自己紹介しようとする「お、お、お、お」と最初の「お」の次が出てこない。高校入学後、最初のホームルームで自己紹介の順番が回ってきて、さっそく「お、お、お、お」に囚われてしまう。

物語は、吃音の志乃ちゃんと、ミュージシャンになる夢を抱きながら生来の音痴である少女との友情を軸に展開していくが、映画の

詳細な紹介はここではスルー。観てのお楽しみ。ピュアな青春映画で、涙腺のゆるい私の頬をべたべたにしてくれたことだけは云い添えておきたいが、それはさておき。作中、クラスの男子が「お、お、おお」と志乃ちゃんの吃音の口まねをしてからかうシーンがある。これがFさん曰く、是か非かで言えば非にあたるものまね。まねされて志乃ちゃんは傷ついていた。私だつてこんなものまねはしたいと思わない。

私が是とするものまねをしているのは、他でもない、志乃ちゃんを演じる若い女優さんだ。ここでも聴こえてきそうな「ものまねと演技は別物」という反論を無視して自説を押し通すなら、この女優さんの吃音演技もまた誰かのものまねに違いない。彼女は、モデルとなる人だか指導してくれた人だかのものまねをすることで吃音を習得し、吃音の志乃ちゃんを演じていたはずなのだ。

私は『志乃ちゃん』の青春ドラマに涙腺をゆるゆるさせながらも、志乃ちゃん女優の吃音演技にはか

なり冷静なまなざしを向け、とうか聴き耳を立て続けた。その結果、つくづく感じたのは、彼女の吃音演技は、これで正解なのか判らないし、といつて不正解とも言えないし、吃音のものまねって難しいものだなあ、ということ。

志乃ちゃんの吃音は、喋ろうとするフレーズの出だして激しくつまづく。だがそこを通過してしま

うと、フレーズの後半はスムーズに流れる。例えば「わ、わわ、わ、わわたしはだじようぶ」みたいに。捉えようによつては、フレーズの最初だけ吃音演技を頑張つて、後半は気を抜いてスルーしているようでもある。だが、いや待て、そもそも吃音とは志乃ちゃんみたいな感じなのかもしれないぞ。「わ、わわ、わた、わたた、わたしはだだだ、だ、だ、だじよ、じよ、だじよう、ぶ」てな具合にフレーズの最初から最後まででもり続けるいかにも吃音然とした吃音も、ないとは言えない。けれども、最初だけつかえて、そこを抜ければ吃音から解放される志乃ちゃん女優タイプの吃音のほう

が、じつはありがちなかもしれない。そんなふうを考えだすと、（お、お、おお…）、吃音っていったい何だろう、（わ、わ、わ、わた、わたた…）、吃音のリアリティってどんな感じなんだろう、と、内なる役者魂の残りかすらしきものがかき立てられて、吃音がどうやら一筋縄ではいかない代物なるがゆえに、まねして、演じてみたくなる。

現実的には今の私、ほぼ過去形の演劇人。差別的であろうとなかろうと、ものまねを舞台上で演じてみせる機会には恵まれそうにな

い。といつて日常的な場面でも、よほど訓練を積んだ上でなければ、それを身近な人の前で披露する自信もない。私が是としたいのは、実際に吃音をものまねすることそのものではないかもしれない。ものまねしたくなるくらい、他者、つまりここでは吃音者の身体性に興味関心をもつことを是としたい、というだけかもしれない。

*

定め、その発現のメカニズムを身体論の観点から解き明かそうとしたのが、伊藤亜紗著『どもる身体』だ。

やつとたどり着いた。

長い回り道をしたのは、吃音に限らず一般に「障害」とされる身体がありようを、自らの身体で、決して馬鹿にするわけでなく再現してみたいという私の探究心と、伊藤亜紗さんの学問的探究心とに通じ合うものを感じたからなのだ。一面識もない伊藤さんではあるが、私は心の内で彼女のことを、勝手に「同志」と見立てている。

伊藤さんを「同志」と感じた最初は、またぞろ『どもる体』からは離れてしまいが、彼女の二〇一五年の著書『目の見えない人は世界をどう見ているのか』を読んだときだ。

かいつまんで云うとこれは、視覚障害者の身体感覚を考究した書物。重要なのは、伊藤さんが「見えない」を欠損、とは捉えていないところだ。

裏を返せば多くの人たちが「見えない」を欠損だと思っている。

見えるのが当たり前の人たちにしてみれば、見えない、はなるほど重要な能力が欠けている状態。だから見えない人を「かわいそう」「気の毒」と思わずにはいられない。一方、見えない側の当事者にしてみても、見える人を基準に成り立っている社会の現実の中で、自身の欠損を否応なく感じさせられる場面には事欠かない。

にもかかわらず、見えない、は必ずしも欠損ではない。伊藤さんはそう捉え、私もそう捉えている。例えば、と、これは伊藤さんが述べていることではなく私独自のたとえ話だが、世の中には「第六感」なるものを持ち主がいるらしい。多くの人びとは五感しか持ち合わせていないので、第六感が無いのは欠損、のはずだが、誰もそうは思わない。第六感がどんなものか解らないし、そもそも世の中が、第六感を持たない大多数の人びとを基準に成り立っているの、それがなくても何不自由なく暮らしていける。けれどももし、世の中の大多数が第六感を持つ人で占められるようにでもなればどうだ

ろう。五感しか持ち合わせない少数派は自らの欠損を痛感し、生きづらさを強いられるかもしれない。第六感を持つ多数派に、あつて当たり前の感覚が一つ欠けていることを「かわいそう」と気の毒がられるかもしれない。

要するにそういうこと。見えないう、を欠損と捉えるのも、見える人間が多数を占める社会だから、に過ぎないのかもしれない。しかも厄介なことに、そう捉え続ける限り、見える人は見えない人を、いつまでも優劣関係の劣、の側に置きっぱなしにしかねない。

ところが私には、見える人が優、見えない人が劣、とは思えない。べつにきれいごとではない。私にとつて見えない人は、別段劣っている人ではなく、その身体感覚への興味が尽きない「他者」なのだ。そう、身体感覚。

伊藤さんも、視覚障害者を劣、だとは考えない。見えない、を欠損とは思わない。見えない、とは、見える人と異なる身体感覚で生きることには違いない、と捉える。そして、見える伊藤さんからすれば

「他者」であるところの、見えな
い人の身体感覚へ尽きせぬ興味関
心を抱き、これをとことん考究し
ようとする。坂道の斜度の認識の
仕方の違いだとか、見える人が平
面的にイメージする富士山を見え
ない人は俯瞰的にイメージする、
とか。伊藤さんは役者ではなく学
者だが、考究中の事柄を自らの身
体で追認したくなって、ひそかに
ちよつとぐらいいは、ものまねだつ
てしてみたことはあるに違いない。

その伊藤さんが、今度新たに世
に問うたのが『どもる体』。吃音
も、もちろん一般にはネガティブ
な「障害」とされる。ちよつど映
画『志乃ちゃん』の主人公志乃ち
ゃんが苦しんだように。だが伊藤さ
んはそんな一般常識を意識しなが
らも、吃音とはどのようなものな
のか、と、ここでも身体感覚への
興味関心に素直に従って、『ども
る体』の中でとことん考究する。
吃音の秘密を暴くことを「差別だ、
馬鹿にしてる」なんて云わせない。
吃音の人たちの身体に生じるこの
「現象」を、まさに現象として考
究し、そして「吃音のとてつものな

いおもしろさ」を発見していく。
伊藤さんの吃音考究のプロセス
を、少しだけ紹介しよう。ただし
少しだけ。詳しくは本書を読んで
みてのお楽しみ。

伊藤さんはまず、心身二元論に
固執して考える、と宣言。今や哲
学などの領域では心身一元論のほ
うが主流らしいが、「吃音当事者
たちの語りが、みな一様に心身二
元論的」だから、「心と体の協調
関係がほころび、両者が分離する
ところに生じるのが吃音」だから、
二元論的な視点に立つ、と云う。

そして、吃音を考える前提。そ
もそも「しゃべる」とは何か。こ
れを身体機能によつてもたらされ
る現象の側面から捉え直し、複雑
なオートマ機能のたまもの、とし
た上で、代表的な吃音の種類であ
る「連発」の摩訶不思議に足を踏
み入れていく。

連発は「最初の音を繰り返す」
症状。「たまご」と言おうとして
「たたたたたまご」になってしまう。
『志乃ちゃん』の主人公志乃ち
ゃんにも見られた「わ、わわ、わわ、
わわ」。伊藤さんは「パソコンで

言うなら、キーボードを叩くと叩
いた以上に多くの文字が表示され
る『バグ』のような状態」と形容
する。

何人かの当事者に話を聴き、連
発の身体感覚をあえて言葉にして
もらう中で、ある人が「言葉を伝
えようとして、間違つて、言葉じや
なく肉体が伝わってしまった、と
いう状態」と語る。「なんとも吃
音の本質を言い当てた表現」と伊
藤さん。

「連発においては、私が一時的に
私の運動の動作主体でなくなり、
体の自動的な運動があらわになる
」。それはかなり苦しいことの
ように、少なくとも当事者でない
人には思えるかもしれない。だが、
と伊藤さんは云う。「もちろん、
社会的な意味で吃音に悩んでいる
人はいます。けれども、まず確認
しておくべきなのは、少なくとも
身体的には連発は楽だ、というこ
とです。なにしろ、連発とは『タ
ガが外れた状態』なのですから」。
吃音のもう一つの代表的類型が
「難発」。一言でいえば「音が出
ない」。特定の単語で音が出なく

なり、しゃべれなくなる。志乃ちゃんのお、お、おお……はひよつとすると連発よりも難発に近い。

「連発が『バグ』だとすれば、難発は『フリーズ』」。だがこれは「症状」なのか。いや、症状であると同時に「対処法」、と伊藤さんは分析する。

人前で話そうとすると身体が硬直し、「細胞の活動が止まってしまふんじゃないかというくらい。世界からいちばん遠くに離されていくみたいな感じの怖さ……」。

ある当事者のこの言葉は、症状、としての難発を言い表している。

一方で難発には、連発を隠し回避するための「対処法」という側面もある。幼いころはあまり気にせず連発に身を委ねていたのに、親にしきりと矯正を促されたり、周囲から奇異の目で見られたりするにつれ、連発は「社会的な行為としてふさわしくないもの」と認識されていく。連発を抑止しようとする身体機能が働き、やがて難発に転じていく……。「『しゃべる』という一つの営みが、『身体運動』と『社会的行為』という二つの基

準のあいだで板挟みになる。吃音は、ダブルスタンダードな障害です」。

さらに……。難発を回避する、身体を裏切る工夫としての「言い換え」とはどのようなものか。志乃ちゃんもそうだったが、歌をうたうときにはどうもならない、「ノる」状態はどうして生じるのか。吃音回避が昂じたとき既存の言語パターンに「乗っ取られる」とは、当事者にとつてどんな身体感覚を伴うのか。

伊藤さんの考究は続く。だが、あとは読んでみてのお楽しみ。この稿は所詮、『どもる体』の紹介ではなく、紹介もどき。確かなのは、伊藤亜紗さんは吃音を興味津々のていで分析し、この本を通じて、ある意味でものまねに近いことをしている、という点。少なくともものまねの極意を解き明かすに等しいことをしている。伊藤さんは、わが「同志」。だから私は、この本を読んで、志乃ちゃん女優の吃音演技が決して手抜きではなく、若い女優さんが懸命に本物の吃音の一典型を模倣し、ものまねしよ

うとした結果、ということにも、それなりに得心がいったのだ。そこで。静まり返った夜更け。

私は『どもる体』を前に置き、こは一つ、吃音のものまねをしてみよう、と、かつての演劇人のはしくれ、試みにそれらしく発話してみる。

「ぼ、ぼ、ぼくは……」。
おや、これは何だ？ 裸の大将か？

吃音のものまね、をとつさにしようとしたとき、つい裸の大将になつてしまう人は、きっと私だけではあるまい。しかしこれは裸の大将のものまねなんだろうか。裸

の大将・山下清を演じた芦屋雁之助のものまねに過ぎないんじゃないだろうか。そもそも雁之助は、本物の山下清を模倣して裸の大将を演じていたの

だろうか。之助以降に山下清を演じた俳優たちは、山下清をまねしてたんじゃなく、雁之助のものまねをしてただけなんじゃないだろうか。ところで、山下清のものまねはFさんに言わせると、是非かというとは、なのだろうか。山下清には総理大臣並みのステータスがあるのだから……。

「ぼ、ぼ、ぼくは、お、おにぎり、が、す、すきなんだな」と、秋の夜長、独り練り返し呟きながら、そんなことを考え始めている。

（伊藤亜紗著、医学書院刊、二〇一八年、二〇〇〇頁）



木内朝進

近年の新聞と部落問題 戸田栄

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 23 第2部
部落差別の原点・原理—その構造と定義 第4章 差別体
質はなぜ民に浸透したか 5 川元祥一

部落解放 762 (解放出版社刊, 2018. 9) : 600円

特集 反差別国際運動 (IMADR) 30周年

本の紹介 黒川みどり・山田智編『竹内好とその時代 歴
史学からの対話』 井岡康時

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 24 第3部
ハフリの世界 川元祥一

部落解放 763 (解放出版社刊, 2018. 10) : 600円

特集 東京における就職差別撤廃に向けた取り組み

本の紹介

被ばく労働を考えるネットワーク編『原発被ばく労災—
広がる健康被害と労災補償』 川瀬俊治/南保輔・中村
英代・相良翔編『当事者が支援する—薬物依存からの回
復 ダルクの日々パート2』 好井裕明

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 25 第3部
ハフリの世界 第3部 朝廷の「幣帛」授受とハフリ 川
元祥一

部落史研究報告集 第22集 (八幡浜部落史研究会刊, 2
018. 6)

小6社会科で被差別身分をどう教えるか〜模擬授業を通
して〜 菊池正

「汚染一揆」の「儉約令」「嘆願書」を現代語に訳す
水本正人

『城下町警察日記』(清文堂 2003年)を現代語に全訳
して気づいたこと—翻訳ミス・解釈ミスについて— 水
本正人

石風呂と癩病患者 五藤孝人

盃状穴の民俗誌〜大洲地方を中心に〜 五藤孝人

部落問題研究 225 (部落問題研究所刊, 2018. 5) : 2, 0
83円

第55回部落問題研究者全国集会報告

全体会

近代日本の社会問題の歴史研究—部落問題、ハンセン病
問題— 猪飼隆明/社会調査から見た部落問題の解決過
程 石倉康次

歴史1分科会

近世京都・妙法院領の新地開発とその地域構造 杉森哲
也/近世大坂堀江新地における町内構造—御池通五丁目
の水帳の分析— 吉元加奈美

歴史2分科会

地方長官会議・東北振興調査会と東北六県—「地域格差」
「地域要求」と「東北の特異性」論— 竹永三男/東北
史から全体史へ—格差の歴史、序列の歴史、差別の歴史
— 河西英通

現状分析・理論分科会

戦後韓国における高齢者の貧困と対策 朴仁淑/生江孝
之と部落問題—神戸時代を中心に— 荻原園子

教育分科会

教育勅語と道徳教育 平井美津子/道徳教育の「特別教
科」化と検定道徳教科書の分析・問題点、どう向き合
うか・実践への提案 倉本頼一

思想・文化分科会

上原善広の「路地」の迷路 秦重雄

部落問題研究 226 (部落問題研究所刊, 2018. 8) : 1, 0
58円

遍路をめぐる三つの肖像—近世後期の四国遍路からみた
民衆世界— 町田哲

近世大坂における都市社会構造—御池通五丁目の家賃の
分析— 吉元加奈美

ラフカディオ・ハーンの作品に見る部落問題—「島根通
信」と「三つの俗謡」を主として— 成澤榮壽

本願寺史料研究所報 55 (本願寺史料研究所刊, 2018.
6)

近世の本願寺、その日その日 左右田昌幸

水と村の歴史 信州農村開発史研究所紀要 31 (信州
農村開発史研究所刊, 2018. 3)

佐久三藩元文三年「穢多取締り令」の再検討 市葉菫哉
史料紹介 与良町小山家の寛保二年「小諸洪水流失改帳
之写」 斎藤洋一

むこうに見えるは 12 (人権ネットワーク・ウェブ2
1刊, 2018. 7)

改進地区における教育の歩み 中

リベラシオン 171 (福岡県人権研究所刊, 2018. 9) : 1,
000円

小学校での部落史学習の現状と取り組みの方向 2—取組
の方向1— 迫本幸二

筑前竹槍一揆ウォークをふりかえる 塚本博和

久留米藩惣長吏頭役の諸相について 堀田秀茂

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 33 資料紹介「松
本治一郎追放の内幕」 石瀧豊美

歴史学研究 972 (歴史学研究会編, 2018. 7) : 741円

近世大坂の道頓堀周辺—非人垣外と水茶屋— 塚田孝

和歌山研究所通信 61 (和歌山人権研究所刊, 2018. 7)

絵図・古地図のウェブ公開は今どのような状況にあるの
か 3 廣岡浄進

和歌山研究所通信 62 (和歌山人権研究所刊, 2018. 9)

ロマ民族 金子マーティン

高野山女人禁制について 木下浩良

榮壽

人権と部落問題 915 (部落問題研究所刊, 2018. 9) : 600円

特集 「部落差別解消推進法」をめぐる争点
「部落差別解消推進法」の「部落差別認識」—「結婚差別」を考える— 奥山峰夫/インターネット上の差別表現と法的規制 杉島幸生/「差別意識」は、なお根深く存在するか 梅田修/「部落差別の実態に係る調査」は、「部落の実態調査」ではない 新井直樹

文芸の散歩道 夏目漱石の姦通小説—『門』の場合 2— 水川隆夫

ごった煮人生をふり返って 6 父の生い立ち 成澤榮壽
追悼 川端俊英先生 秦重雄

人権と部落問題 916 (部落問題研究所刊, 2018. 10) : 600円

特集 部落問題研究所創立70周年
文芸の散歩道 夏目漱石の姦通小説—『門』の場合 3— 水川隆夫

じんけん ぶんか まちづくり 60 (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2018. 7)

特集 同和問題解決推進協議会答申
映画評 「焼肉ドラゴン」 佐佐木寛治

振興会通信 141 (同和教育振興会刊, 2018. 7)
同朋運動史の窓 47 左右田昌幸

信州農村開発史研究所報 144 (信州農村開発史研究所刊, 2018. 6)

八重原村の被差別部落の歴史 4 柳沢恵二
白水智『古文書はいかに歴史を描くのか』の紹介 斎藤洋一

崇仁～ひと・まち・れきし～ 6 (崇仁発信実行委員会刊, 2018. 11)

特集 崇仁のお店, 東九条マダン
月刊スティグマ 264 (千葉県人権センター刊, 2018. 7) : 500円

千葉県の部落史を歩く2 里見氏と被差別民 坂井康人
月刊スティグマ 265 (千葉県人権センター刊, 2018. 8) : 500円

千葉県の部落史を歩く3 里見氏と皮作り 坂井康人
月刊スティグマ 266 (千葉県人権センター刊, 2018. 9) : 500円

千葉県の部落史を歩く4 万石騒動と被差別民 坂井康人
[世界人権問題研究センター]研究紀要 23 (世界人権問題研究センター刊, 2018. 7) : 2, 500円

京都・大津間の交通網整備と朝鮮人労働者—山科地区を中心に— 高野昭雄

「公立学校的」存在としての朝鮮学校—愛知県朝鮮学校の新設・移転・統廃合— 中島智子, 呉永鎬
人権としての成人教育—成人基礎教育保障の仕組み—

上杉孝實

史料紹介 河原者の結縁史料—新発見の像内納入文書の紹介— 川嶋將生

月刊地域と人権 412 (全国地域人権運動総連合刊, 2018. 8)

「部落」の「今」はどうなのか 2 —地域に住む人々からの聞き取り 丹波真理

地域と人権京都 769 (京都地域人権運動連合会刊, 2018. 7. 15) : 150円

京都府作成パンフ 「同和問題と人権—部落差別のない社会へ—」の問題点

であい 676 (全国人権教育研究協議会刊, 2018. 7) : 160円

ヘイトスピーチ解消法施行と学校教育の課題 文公輝
人権文化を拓く 248 天皇と人権 高橋源一郎

であい 677 (全国人権教育研究協議会刊, 2018. 8) : 160円

人権文化を拓く 249 「こちら側」と「そちら側」 玉井真理子

日本史研究 670 (日本史研究会刊, 2018. 6) : 1, 100円
<南王子村の歴史>研究が明らかにしたこと—「奥田家文書」の研究史的意義— 畑中敏之

故脇田修先生を想う 藪田貫

ヒューマンライツ 364 (部落解放・人権研究所刊, 2018. 7) : 500円

特集 放送メディアのいま—人権の視点から考える

ヒューマンライツ 365 (部落解放・人権研究所刊, 2018. 8) : 500円

特集 性的マイノリティの人権をめぐる状況

ヒューマンライツ 366 (部落解放・人権研究所刊, 2018. 9) 500円

特集 部落解放・人権研究所50周年

追悼 同志・西岡智先輩の死を惜しむ 大賀正行

ひょうご部落解放 168 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2018. 3) : 700円

特集 第32回人権啓発研究集会

シンポジウム 「差別解消法の実体化をめざして」/分科会講演 条例に基づく人権意識実態調査の実施とその分析/分科会講演 インターネット上における部落差別事象モニタリング制度

本の紹介

齋藤直子著『結婚差別の社会学』 北川真児/伊藤詩織著『Black Box ブラックボックス』 福岡ともみ

部落解放 760 (解放出版社刊, 2018. 7) : 1, 000円
第44回部落解放文学賞

部落解放 761 (解放出版社刊, 2018. 8) : 600円

特集 学級づくりと子どもの育ち

本の紹介 山本命著『松浦武四郎入門—幕末の探検家』

収集逐次刊行物目次 (2018年7月～9月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

IMADR通信 195 (反差別国際運動刊, 2018. 7)

特集 マイノリティ女性と複合差別 IMADR30年

ウィングスきょうと 147 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2018. 8)

図書情報室新刊案内

河野真太郎著『戦う姫, 働く少女』／ホープ・ヤーレン著『ラボ・ガール 植物と研究を愛した女性科学者の物語』

解放新聞 2866号 (解放新聞社刊, 2018. 7. 9) : 90円

元中執、研究所名誉理事 西岡智さんが死去

解放新聞 2869号 (解放新聞社刊, 2018. 7. 30) : 90円
記念館の完成祝い 朝田教育財団

解放新聞 2872号 (解放新聞社刊, 2018. 8. 27) : 90円
本の紹介 金明秀著『レイシャルハラスメントQ&A』
文公輝

解放新聞 2876号 (解放新聞社刊, 2018. 9. 24) : 90円
本の紹介 鳥取県部落史研究会編『近世の皮革統制と流通—中国・播磨地方の諸藩を中心に—』 阿南重幸

解放新聞愛知版 461 (部落解放同盟愛知県連合会刊, 2018. 6. 1) : 100円

記念講演 全隣協第23回東海ブロック女性職員研修会講演 (要旨) 3 隣保館事業に24年かかわって—部落差別と地域福祉対策のはざまで— 伊藤卓夫

解放新聞愛知版 463 (部落解放同盟愛知県連合会刊, 2018. 8. 1) : 100円

記念講演 全隣協第23回東海ブロック女性職員研修会講演 (要旨) 4 隣保館事業に24年かかわって—部落差別と地域福祉対策のはざまで— 伊藤卓夫

解放新聞改進黨 504 (部落解放同盟改進黨部刊, 2018. 7)

2018年度教育懇談会 第2回 要約 竹田小学校で学んだこと—「解放の学力」をめざして— 外川正明さん

解放新聞京都版 1123 (解放新聞社京都支局刊, 2018. 7. 10) : 70円

本の紹介 六車由実著『介護民俗学という希望 「すまいるほーむ」の物語』

解放新聞京都版 1128 (解放新聞社京都支局刊, 2018. 9. 10) : 70円

本の紹介 西崎雅夫編『証言集 関東大震災の直後 朝鮮人と日本人』

架橋 39 (鳥取市人権情報センター刊, 2018. 8)

特集 「人間回復の橋」架橋30年を迎えて

高校生への「同和(部落)問題に関するアンケート」の結果を考える 田川朋博

語る・かたる・トーク 282 (横浜国際人権センター刊, 2018. 8) : 550円

シリーズ「解放教育」継承への扉 78 教職40年を終えて—1—学生からの卒業証書— 外川正明

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 劇「ナツノオト」 吉成タダシ

語る・かたる・トーク 283 (横浜国際人権センター刊, 2018. 9) : 550円

シリーズ「解放教育」継承への扉 79 教職40年を終えて—2—リハビリの日に学び直したこと— 外川正明

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「最近の若者は」 吉成タダシ

かわとはきもの 184 (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2018. 6)

靴の歴史散歩 129 稲川實

皮革関連統計資料

京都市地域・多文化交流ネットワークサロン通信

26 (京都市地域・多文化交流ネットワークサロン刊, 2018. 6)

東九条を知る学習会「東九条の歴史～4ヶ町編」(3/2) 報告 第2弾 講師: 叶信治さん

グローブ 94 (世界人権問題研究センター刊, 2018. 7)

日常実践としての社会調査を通じた隣保館の構築 中川理季

藝能史研究 222 (藝能史研究會刊, 2018. 7)

「松囃子」考 山路興造

人権と部落問題 914 (部落問題研究所刊, 2018. 8) : 600円

特集 世代を超えて平和を紡ぐ

文芸の散歩道 夏目漱石の姦通小説—『門』の場合— 1— 水川隆夫

ごった煮人生をふり返って 5 祖父から養子の父へ 成澤

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://shiryo.suishinkyokai.jp>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分